

ソフトテニスにおけるポジション別心理的競技能力の検討

Psychological competitive ability of forward and back players in soft-tennis

1K10C067-2

主査 正木宏明 先生

内山 睦基

副査 作野誠一 先生

【目的】

このソフトテニスという競技で、精神的不安や技術、体力などが大きく試合の勝敗を左右する。しかし、何がこのソフトテニスという競技で大切な要因とされるかというと、それは、ポジション（ペア）である。ソフトテニスは二人一組で試合を行うダブルスが主流であり、このペアとの相性が一番重要となる。このペアとの相性を考えたとき、自分のテニスのスタイルやレベルが相手と補完し合って完全なものとなるかどうかで判断する。だが、それよりも精神面で相性が良いかどうかということ で判断していくべきである。

そのためには後衛には後衛の、前衛には前衛の性格やパフォーマンス意識、ポジション適性があり、そのポジション別の精神パターンを確立する必要がある。そのポジション別の相性が正確に分かることによって、もっとも相性の良いパートナーが生まれ、勝つための要因になるといえる。また、個々の性格が今まで以上に顕著に割り出すことができると、その選手に適しているプレーを見出すことができるかもしれないと考え本調査を実施した。

【方法】

調査日時…本調査は2013年10月28日から11月4日にわたって行った。10月28日にYG性格検査とDIPCA（diagnostic inventory of psychological-competitive ability for athletes：DIPCA）を選手に一週間以内までの期限として配布し、調査を行った。

調査対象者…早稲田大学男子軟式庭球部に所属する現役プレーヤー、早稲田大学男子ソフトテニスサークルを対象とした。早稲田大学男子軟式庭球部、1年生：8人（前衛5人、後衛3人）、2年生：4人（前衛2人、後衛2人）、3年生：4人（前衛1人、後衛3人）、早稲田大学男子ソフトテニスサークル、11人（前衛5人、後衛6人）この両所属選手、合計27人で実施した。

質問紙…YG性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）、DIPCA（心理的競技能力検査）を使用した。

【結果】

DIPCAでは、選手間（アスリート、非アスリート）・ポジション間（前衛、後衛）において2要因分散分析で比較した結果、全ての項目（忍耐力、闘争心、自己実現意

欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性）の計12の項目において有意差は認められなかった。YG性格検査では、DIPCAと同様にアスリート・非アスリート×前衛・後衛の2要因分散分析を行った結果、G項目（一般的活動性）にて交互作用が有意であった（ $F(1,23)=4.33, p=0.049$ ）。その後、下位検定の結果、非アスリート群では後衛の方が前衛よりもG項目の得点が有意に高かったものの、アスリート群では差はなかった。また、後衛のG項目はアスリート群よりも非アスリート群の方が有意に高かった。（それぞれ $t(9)=2.82, p=0.020$, $t(13)=2.16, p=0.049$ ）。その他の尺度で（抑うつ性、回帰性傾向、劣等感が強いこと、のんきさ、思考的外向、支配性、社会的外向）の計11の性格特徴の有意差は認められなかった。

【考察】

DIPCA（心理的競技能力）で有意差がでなかった原因として、アスリートと非アスリート群の競技成績の差が大きくは見られなかったこと、また、アスリート群の中にも大会上位入賞していない選手がいたことなどが挙げられる。結果、アスリートと非アスリートの間には差が生まれなかった。競技を実際やる際に、アスリート、非アスリートの選手に両質問紙に記入してもらったと考えた。また、2つの期間に分けて心理的競技能力を検討することにより、より良い結果が望めたと考える。

YG性格検査（矢田部ギルフォード性格検査）は、G項目（一般的活動性）にて交互作用が有意であった。その他の尺度で（抑うつ性、回帰性傾向、劣等感が強いこと、のんきさ、思考的外向、支配性、社会的外向）の計11の性格特徴の有意差は認められなかったが、今回、有意差は出なかったが各カテゴリーの平均値から読み取れた結果が可能性のあるものになったと考える。早稲田大学軟式庭球部、テニスサークルのチーム特性がより強くでる時期や期間、場所などをよく考えた上で、両質問紙で分析すべきであったと考える。また、アスリートに関しては、同じ環境で生活し、ソフトテニスをしている時間が長い分大きな違いがみられなかったのではないかな等の問題もあった。